

東京大学文学部死生学・応用倫理センター・翰林大学生死学研究所共催国際シンポジウム

東アジアの死生学へ

趣旨説明

文化的差異の視点から死生学を考える

池澤優

以下は、二〇一四年十二月二〇日（土）に東京大学福武ホールで、死生学・応用倫理センターと翰林大学生死学研究所が共催で開催した国際シンポジウム「東アジアの死生学へ」の記録である。

東京大学文学部死生学・応用倫理センターは、毎年、死生学や応用倫理の分野に関わる国際的な研究会や講演会を開催しているが、二〇一四年度は、韓国の代表的な死生学研究機関である翰林大学生死学研究所との共催で、「東アジアの死生学へ」と題した国際シンポジウムを開催した。本稿は、死生学を論じる上で、なぜ東アジアを問題にしなければならないのか、シンポジウムの趣旨を説明することを目的とするが、そのためには今まで東京大学文学部が展開してきた「死生学」のプロジェクトについて説明せねばならず、更に背景として死生学という分野——欧米では death studies, thanatology と呼ぶ方が一般的である——が、どのような背景から生まれ、どのような特徴を持つのかを説明しなければならぬ。先ずは東京大学文学部の「死生学」プロジェクトから話を起こしていきたい。

東京大学文学部の「死生学」プロジェクトは、二〇〇二年に二一世紀COEプログラムの一つとして始まった。二〇〇七年四月からはグローバルCOEプログラムとして更新され、二〇一二年三月に終了したが、その後継組織が死生学・応用倫理センターになる。一〇年に及ぶCOEプログラムの活動は多方面に及び、無数と言つて良いほどのシンポジウムや研究集会が開かれたが、その大きなテーマの一つは日本の死生観の独自性をその歴史や文化との関連で明らかにすることであつた。そのためには、東アジアにおける死の捉え方全般の中に日本の死生観を位置づけて、共通性や差異を考えていく必要がある。そのため、以下のように、韓国、中国、台湾において、*「東アジアの死生学」*をテーマとするシンポジウムを四つ開催してきた。

日中国際研究会議「中日『東亜生死学』国際学術研討会（中華日本哲学会共催）、二〇〇八年二月一九日。

日台国際研究会議「東アジアの死生学へ」（国立政治大学宗教学大学院共催）、二〇〇九年一〇月三〇日。

日韓国際研究会議「東アジアの死生学へ」（成均館大学校共催）、二〇一〇年一月二〇日。

日台国際研究会議「東アジアの死生学へ」（国立中文大學日本研究センター共催）、二〇一一年一〇月七日。

死生学を展開する上で、アジアという文化を特に問題としなければならない理由は、欧米で生まれた死生学（タナトロジー）という学問のある種の特異性と、それに対する我々の反省にある。そこで次に、タナトロジーという分野がいかなる特殊性を持っていたのか論じたい。

一 死の自覚運動とタナトロジーの興起

死は人間の生において最大の問題であるので、昔から様々な分野で探究されてきたが、一つの学問分野としての死生学が構想されたのは、それ程古いことではなく、概ね一九六〇〜七〇年代の欧米においてであ

る。タナトロジーの教科書である Wass, Hannelore & Neimeyer, Robert A., *Dying: Facing the Facts* (Taylor & Francis, 一九九五年, 第三版) はその序文で、タナトロジーは死と死にゆくことに関する学問であるが、同時に社会現象としての「死の認知運動 (death awareness movement)」の一部であり、その中心となる方法論は社会心理学と臨床であると述べている。その教科書の目次は次のようになっている。

第一部 文脈と視点

第一章 Keatl, Michael C. 死と政治——心理社会的視点

第二章 Morgan, John D. 我々の死と哀しみを生きる——歴史的・文化的態度

第二部 事実——死と死にゆくことの実実

第三章 Neimeyer, Robert A. and Brunt, David Van 死の不安

第四章 Samarel, Nelda 死のプロセス

第五章 Benoitel, Jeanne Quint and Degner, Lesley F. 死にゆくことの制度——文化的価値、技術、社会組織の収斂

第六章 Latranyi-Licht, Marcia and Conner, Stephen. 死にゆく者へのケア——ホスピスのアプローチ

第七章 Wolf, Sheryl Scheible. 死を計画することに関する法的視点

第八章 Fulton, Robert 現代の葬式——機能と機能不全

第九章 Rando, Therese A. 悲嘆と喪——喪失と共存する

第一〇章 Klass, Dennis 悲嘆の解消のスピリチュアルな側面

第十一章 Wass, Hannelore 子どもの思春期の生における死

第二章 Stillion, Judith M. 成人の生における死——鐘の音に応答する

第三部 諸問題

第三章 Peterson, Karen E. エイズ——十年が過ぎて

第四章 Leenaars, Antoon A. 自殺

第五章 Zucker, Arthur 権利と死にゆくこと

第六章 Veatch, Robert M. 死の定義——公共政策の問題

第四部 結論

第七章 Wass, Hannelore and Neimeyer, Robert A. 結論的考察

第八章 Wass, Hannelore and Balk, David E. 文献

これを見ると、確かに学際的ではあるのだが、死にゆくこと (dying)、死別 (bereavement) における悲嘆 (grief) の過程とそれへの対処が中心になっており、また心理学や社会心理学の手法が中心的で、社会学や歴史・文化に対する関心は強くないことが見て取れる。欧米のタナトロジーがそのような傾向を帯びたのは、「死の認知運動」と表現されているように、一九六〇年代くらいまで支配的だった死の捉え方に対するアンチテーゼとして始まったことが大きな要因であると考えることが可能である。

フランスの歴史学者、フィリップ・リエスは中世から現代までのヨーロッパにおける死に関する考え方や表象の変遷を分析し、二〇世紀の死に「倒立した死」という名をつけた。¹「倒立した」ということの意味は、歴史上、類例がない異常な事態だということである。一九世紀までは死に対する考え方や態度は様々に変化したにせよ、公的に死を表現する方法が習慣によって決まっていた。ところが、二〇世紀になるとそのような伝

統が崩壊し、死は公的に表現されなくなり、公的空間から排除されるようになる。病院が死の場になることにより、社会的にはあたかも死が存在されないかのように振る舞うのが普通になり、死につつまある者も、死など存在しないかのように、最後まで前向きに生きることが望ましいとされるようになる。イギリスの人類学者、ジェフリー・ゴラーはそれを「死のボルノグラフィ」と呼んだ。²⁾「死の認知運動」とは、そのような傾向を疑問視し、死という現象を自覚し、それを表現しようとする、換言するならば、死の復権を目指す運動のことであった。

六〇年代から七〇年代にかけての「死の自覚運動」には多くの要素があり、例えば、医療倫理に代わって生命倫理という領域が出現するのもほぼ同じ時期であり、シシリー・ソングラス (Cicely Saunders, 一九一八～二〇〇五) が一九六七年にロンドンでセント・クリストファー・ホスピスを開設したことから始まった、ホスピス、パリアティブ・ケアの実践も重要な構成分野である。しかし、六〇年代初頭から続々と現れた、後にタナトロジーという語で包括されるようになる一群の心理学の研究が「死の自覚運動」に大きく貢献したことは確かである。³⁾ 一般にタナトロジーの始まりは、ヘルマン・フェイフェルという心理学者が一九五九年に『死の意味するもの』という論文集を発刊したことに求められ、⁴⁾ またその前年には後に自殺学 (suicidology) を大成することになる心理学者エドウィン・シュナイドマンがロサンゼルス自殺予防センターを開設している。それからそれに続いて現れた研究を年表風に一覧にしてみると、次のようになる。

一九五八： Edwin Shneidman、ロサンゼルス自殺予防センターを開設

一九五九： Herman Feifel ed., *The Meaning of Death*.

一九六〇： 国際自殺予防学会創設

- 一九六二： Ernest Becker, *The Birth and Death of Meaning: a Perspective in Psychiatry and Anthropology* (死の恐怖が人間の根源的、生得的な性向であり、その克服と抑圧が文化の機能であるとする。恐怖管理理論という心理学の基礎になる)
- 一九六三： Jessica Mitford, *The American Way of Death* (葬送産業に関する社会学的研究)
- 一九六五： Barney Glaser & Anselm Strauss, *Awareness of Dying* (臨床における告知のあり方を決定する要素の分析と、終末期の患者の死に対する態度の類型に関する社会学的研究)
- 一九六五： Robert Fulton、ミネソタ大学で死の準備教育を開始
- 一九六七： Robert Lifton, *Death in Life: the Survivors of Hiroshima* (死を克服するために象徴的な永続を構築するものとして人間の営みを捉える。リフトンはライフヒストリー分析の手法をとる)
- 一九六七： Shneidman、*Bulletin of Suicideology* 誌を創刊
- 一九六七： Elisabeth Kübler-Ross, *On Death and Dying* (死の過程に関する草分け的研究)
- 一九六九： John Bowlby, *Attachment and Loss* (人間の行為を愛着対象の喪失に対する対応と捉え、宗教を含む文化装置を愛着対象の代替と理解する、愛着理論を唱えた)
- 一九七〇： Robert Kastenbaum、*Omega: journal of death and dying* 誌を創刊
- 一九七二： Avery Weisman, *On Dying and Denying: a Psychiatric Study of Terminality* (死と死後に関する宗教観念が自己の永続の願いをかなえるために機能していることを論じる)

以上を見れば明らかのように、一九六〇年代にタナトロジーの重要な理論が出そろい、そしてその多くは心理学者によるものであった。その中で主題化された重要なテーマの一つは死の恐怖／不安であり、それは人間

には潜在的、顕在的に死に対する恐れがあり、それが死を思考し表現することを抑圧している、故に死の不安を抑えることで、死に前向きに向かい合い、最終的には乗り越えることは可能であるというものであったと要約できる。

死の恐れとならんでタナトロジーの主テーマになったのは、シュナイドマン（やはり心理学者である）が牽引役となった実践的な自殺予防運動とならび、死の準備教育（death education）、死のプロセスである。後者のテーマを確立する上で決定的な影響力を与えたのがエリザベス・キューブラー・ロス（Elisabeth Kübler-Ross, 一九二六～二〇〇四）の *On Death and Dying* (1969, 鈴木晶訳『死ぬ瞬間——死とその過程について』中公文庫、二〇〇一）であることは疑いない。⁷しかし、タナトロジーはキューブラー・ロスに対してどちらかという冷淡であり、過去に多くいた死のプロセスの研究者の一人という扱いである。例えば、先述した教科書の第四章「死のプロセス」(Nelda Samarel, “The dying process”, Wass & Neimeyer 前掲書)では、死の過程の概念を定立する上でキューブラー・ロスの功績が大きかったことを認めつつも、否認↓怒り↓取り引き↓抑鬱↓受容という有名な五段階の死の過程の理論は、そのような段階が存在すること、そのような段階を経由すること、そのように解釈できることのいずれにおいても「証拠」がなく、患者個人の個性性を認めず、全員が五段階を経て「受容」に至るように周囲が強要しかねないため、有害無益であるとする批判を五点に要約している。確かにキューブラー・ロスが死の過程の最後を「受容」と表現したことは、言葉としては適当ではなかったとは言えるかもしれない。⁸が、タナトロジーの中では死の過程を「証拠」（統計的な証拠）により実証することが繰り返し試みられる一方で、キューブラー・ロス本人は五段階は必ずしも直進的に進むわけではなく、また個人差が大きいことを繰り返し強調しているにもかかわらず、「受容」という言葉で彼女が結果的に含意してしまった、死に対し前向きに対処し、最終的には乗り越えるという枠組みは前提とされていた。それは身近な者の死

を経験した悲嘆のプロセスの研究においても同様である。タナトロジーの実践運動として重要だったのが「死の準備教育」(death education)になるが、それは普段から死を意識することで不安を低下させ、実際に死に直面した時に受容に至るプロセスを容易にし、あるいは身近な者の死に対する悲嘆から早く回復して、死者から離れることを促進するのが目的であった。

タナトロジーが単に学問として死を研究するだけではなく、死を隠蔽するという現代のあり方を疑問視し、それを変革する運動であった以上、それが特定の価値観——死を直視し受容することで、我々は前向きに生きることができる、死を乗り越えることができるという価値観——を前提にすることは悪いこととは言えない。しかし、タナトロジーは学問でもあったので、それは死を直視して乗り越え、前向きに生きるという価値観を学問の名の下に押しつける危険性を内包していることになる。タナトロジーが内包していた価値観は、生と死を全くの対立と考え、死を一種の「敵」として扱うという枠組みを前提にしていたが、アリエスが描いたように、中世ヨーロッパにおいて生と死が連続・共存していたのであって、ヨーロッパの歴史においてすら死を「敵」として扱うという態度は特定の時代の産物であったのである。¹⁰

二 日本 の 死 生 観 と 死 生 学

日本文化あるいは東アジアの文化全体が、西洋近代のように生と死を根本的な二元対立としない傾向があると言われる。その可否は置いておくが、確かに日本の伝統の中に、死を敵視しないで「受容」する傾向があったことは確かである。一例を挙げるなら、本居宣長は我が国の死の捉え方を最も見事に表現した人物の一人であるが、彼は善人も悪人もみな死に黄泉の国に行くことが、神により定められた人間としてのあり方であ

り、それを悲しいこととして悲しむのが人間にとつての自然であると言っている。彼なら死を直視して乗り越えるというのは、不自然な「さかしら」だと考えるであろう。我々の同僚であった竹内整一は、本居宣長のこの捉え方を含め、日本人の死生観を共時的あるいは類型論的に表現することを試みている。¹² 発表者なりにその論点をまとめるなら、以下のようになる。

日本人は人間の有限性、死を悲しむことを通して、他者への倫理だけでなく、*「超越的なもの」*を知覚することを可能にしてきた。もちろん日本文化の中でも宗教（特に仏教）は重要であり、絶対的な神や死後（浄土）を設定することで死を超越することは一つの方法ではあった。しかし、死後の存在を信じることで死を悲しまないのは不自然であり、人間として欠けているところがあると感じる感性が日本人には存在したのである。むしろ人間の有限性、無力感を受け止めることによつて、他者との共感が生まれ、その傷つきやすさ、個々人のかけがえのなさを感じることができる。人間の有限性を悲しむとは、人間が宇宙の中で「二滴」の水でしかないが、唯一無二の「一滴」であると認識することであり、死者はそのような悲しみ以外では姿を表すことはない。

同時に、人間の有限性が宇宙の摂理である（即ちそのようなものとして作られている）と認識すること、人間がある種の*「超越性」*につながるものが可能になる。日本人の「さようなら」という分かれ言葉には「そうであるならば」、即ち今を確認し、過去の人生を総括し、そこに働いている摂理（*「自ずから」*）を認めた上で、主体的に未来に踏み出していく（*「自ら」*）という意味が内包されている。「二滴」の比喻を再び用いるなら、人間は「一滴」として個別的な存在であるが、同時に「一滴」であることにより全体に通じているのである。死すべき存在であることによつて宇宙的な摂理に内包されるのである。

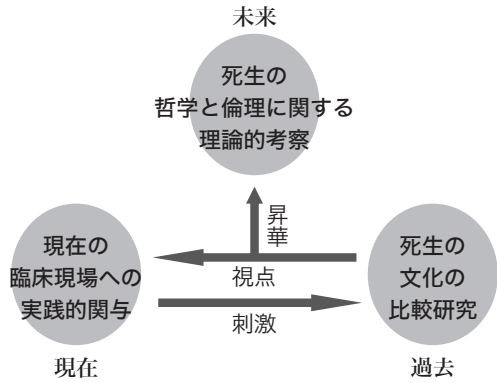
宗教的な彼岸性を通して超越性を求めなかった日本人は、死を超越すべき対象とせず、人間にできるのは今ここにある生を精一杯生きることであり、死すべき時が来たら、悲しみつつそれと別れること（「さようなら」）

を通して、自分が確かに存在したと、そして自分の死後も確かに世界は続いていくことを確認し、それにより自分の生を意味づけ死を受容してきた（金子大栄「花びらは散る 花は散らない」）。

ロバート・リフトンが指摘しているように、生が死により限界づけられているという事実を前にして、生き入る必要がある（リフトンはこれを「象徴化の原理」と呼ぶ）。それは人類共通の「戦略」であると言えるだろう。ただ、リフトンはこの象徴的不死という「戦略」には幾つかの方法があるとして、それを生物的、神学的、創造的、自然的、経験的という五つの類型に分類した上で、日本人の場合は、生物学的あるいは自然的な不死性、即ち個人は死によって永続的な全体性（集団なり宇宙なり）に回帰するという類型を選択する傾向が強いという¹³。タナトロジーが死に負けない前向きな生を確立することで死を超越しようとするのは、確かに象徴的不死の一つの方法ではあるが、それはあらゆる文化が同様の戦略を採用していることを意味しない。日本文化の場合は、死を受容することを通して生を意義づけようとする傾向が強いのであって、それも一つの方法であると言いうことができる。

三 東京大学死生学プロジェクトの死生学構想

二〇〇二年に東京大学文学部が「死生学」のプロジェクトを始めたとき、私たちは当然、欧米のタナトロジーを意識したが、同時にタナトロジーの文化的な限界、およびそれが日本文化の死生観とフィットしないという感覚をも認識せざるを得なかった。これが日本とアジアの文化に根ざした「死生学」を構築することを我々が目指すことになった理由になる。



COEプロジェクトの初代リーダーである島園進は、シリーズ『死生学』の巻頭論文「死生学とは何か——日本での形成過程を顧みて」の中で、死生学の基本構想を、①死生の文化の比較研究、②死生の哲学と倫理に関する理論的考察、③現在の臨床現場への実践的関与の三つを柱にすると述べている。この構想を筆者なりに肉付けするならば、以下のようなだろう。

現代において急速に死のあり方が変貌しつつある中で、それを考え、複合的かつ柔軟に対応することは何よりも必要である。しかし、それが付け焼き刃的な対応に終わるなら、本当の意味で現代の諸問題を乗り越えることはできない。何よりも、人類は今までの歴史上の変化を常にその時点において有していた知を活用することで乗り越えてきたのであり、それは二〇世紀後半以降の変化においても例外ではない。それ故に、現代に対応する真の学知は、人間存在の本質に対する深い洞察と、過去の歴史に関する豊かな知識に裏付けられなければならない。

故に、③の領域は、現代的な状況に積極的に関わり、そこで何が起きつつあり、いかなる知が求められているのかを知るための「臨床」的分野であるが、そこで得られた知見は、人類のあり方と歴史に照らして検討されねばならない。③が現在に関わる分野であるとするなら、①の分野は、死生や倫理に関して人類が積み重ねてきた知を探索する、歴史的、文化的な研究の領域になるであろう。③は①に刺激を与え、新たな研究領域を切り開くための原動力となるのに対し、①の分野は③の分野に対し、現状を理解し、問題点を探るための視点

を与える。しかし、それだけでは充分ではない。③の分野（現在）と①の分野（過去）を踏まえた上で、では将来においてどうあるべきであるのか（未来）に昇華させる必要がある、それが②の哲学的な分野になる。即ち、死生学が構築しようとする学知は、現在と過去を踏まえた上で、未来を展望するという構造を持っているのである。

四 東アジアの死生学へ

まとめるなら、我々の「死生学」プロジェクトは、タナトロジーの文化的限定性を認識した上で、より包括的なアプローチを選択したのであって、歴史的、文化的な特性の中で死を考えていくことを志向すると言うことができる。このことは我々の「死生学」の方がタナトロジーよりも学問的だとか客観的だとかいうことを主張するものではない。今述べた「死生学」構想が示すように、死生学の出発点は現在の生と死の現場に向き合うことにあり、現場が特定の文化・社会的状況により規定されている以上、そこから生み出された学知は日本という文化と社会の限定を受けたものになり、普遍的と言うわけにはいかないであろう。

重要なことは、そのようにして生み出された学知が普遍的な有効性を持っていないことを認識しておくことであろう。現場に向き合つて構築した知が、唯一絶対の普遍的なものと思ひ込むような独善に陥つてはならない。いかなる学知も時代と文化の限定を受けざるを得ず、しかも現在のものの見方は我々にとつて余りにも当たり前のものなので、我々は自らの非限定性に関して無自覚になりやすい。しかし、状況が刻々と変化し、新しい問題が次から次へと生じる中で、現在の考え方や視点だけで対応できるとは限らない。全く新しい発想、全く新しい視点が時に必要とされ、そのためには現在の当たり前の見方を相対化できるだけの余裕が必要な

である。

死生学における文化比較、異文化との対話は何よりもそのために必要なのだと考える。特に東アジアは儒教や仏教など、多くの要素を共有しつつ、多くの異なる状況、問題、そして視点を有している。そのような共通性と差異を学ぶことで、我々は別の見方、視点があることを知ることができ、そこから問題に対する新しいアプローチを開拓することができるのである。

このシンポジウムで共催の労を担っていただいた翰林大学生死学研究所は、韓国で初めての死生学の専門機関であり、特に自殺予防への取り組みで知られている。自殺問題は言うまでもなく死生学における大きな問題であるが、自殺そのものの状況も、それへの取り組みも日本とは大きな違いがあると聞いている。また、アメリカで生まれた「自殺学」の方法論に対して、日本と韓国でそれぞれのように考えているのかも、関心を引くテーマである。このため、このシンポジウムでは韓国と日本の死生学の取り組みについて、先ず総論的な報告を行っていただき、その後に各論として、自殺問題を含む現在の状況について論じていただくという構成にした。全体の構成は以下の通りになる。

第一部 総論

発表一 裴寛紋 「韓国における死生学研究の現況と課題」

発表二 清水哲郎 「日本における臨床死生学と臨床倫理学の交叉」

質疑応答

第二部 各論

発表三 李憲益 「セウオル号沈没事故と死の表象の疫学——韓国社会において死ぬということの意味」

発表四 松本俊彦「日本における若者の自殺関連事象——身体改造とインターネットとの関連」

発表五 呉進輝「自殺者の死の認識に関する分析——自殺者の遺書を中心に」

質疑応答

第三部 総合討論

司会は、東京大学文学部死生学・応用倫理センター准教授の堀江宗正氏にご担当いただいた。

このシンポジウムが、死生学という新しい領域における東アジアでの交流の機会になることを願うものである。

■註

- 1 Arès, Philippe, *L'homme devant la mort*, 1977 (成瀬駒男訳『死を前にした人間』、みすず、一九九〇)。アリエスはヨーロッパにおける死の歴史を五期に分け、それぞれにユニークな標題をつけた。第一が中世前期に相当する「飼いならされた死」、第二が中世後期の「己の死」、第三がルネサンス期の「遠くて近い死」、第四が近代の「汝の死」、第五が現代の「倒立した死」である。「飼いならされた死」の段階では、最後の審判の時に復活することを希望して、人々は教会に葬られた。死の瞬間は重要ではなく、最後の審判を待ち寝ているのが死であった。それが「己の死」の時代になると、人は死の瞬間に身体から靈魂が分離して、自ら天国か地獄かを選択するものとされ、地獄に墜ちた場合に備えて、生きている間から自らを救済する儀式を用意するようになる。「遠くて近い死」の段階では、宗教改革により墓地在教会から分離し、死後よりも生前の生き方が強調されたため、死の瞬間の重要性は低下した。また、科学によって死を乗り越えるという考え方が初めて現れる。近代の「汝の死」の中では、戦争死者は国民国家の象徴として扱われる一方、一般の死は家族という私的領域の出来事とされ、愛する者の死をロマンティックに美しく描くよう

になった。「倒立した死」になると、その反動から死の醜い面が隠され、死にゆく者に対する告知が行われなくなり、病院が一種の死の隠れ家の性格を帯びるようになる。

- 2 Gorer, Geoffrey, *Death, Grief, and Mourning in Contemporary Britain*, 1965 (宇都宮輝夫訳『死と悲しみの社会学』、ヨルダン社、一九八六)。ゴラーの研究は、近親者と死別した者に対するインタビューと参与観察によって、一九六〇年代のイギリスにおける死に関する暗黙のルール(社会的コード)を発見しようとするものであり、彼は、伝統的慣習や信仰を残しているマイノリティーを除き、嘗て死に関する行動を規定していたキリスト教的慣行は説得力と規制力を失っており、個々人が自らの工夫で死を扱うための儀礼を創出することを迫られていること、それに成功できない場合は、身体的・精神的な不調や、哀悼の拒絶や抑圧、あるいは逆に病的な哀悼を引き起こしているということを発見した。死を公的に表現するための共有された手段が失われたことで、死は人を「むかつかせる」ものとなり、隠される一方、大衆に提供される空想の中では多くの死が描かれることになった。ゴラーがこれを「ボルノグラフィー」と呼んだのは、公的には忌避される対象でありながら、空想の中で満足させるといふ構造が、嘗て性描写に該当するあり方だったからである。

- 3 カール・ベッカー「アメリカにおける死生観教育——その歴史と意義」、シリーズ『死生学』1、東京大学出版会、二〇〇八。イーリヤ・ムスリン『近年の北米心理学理論における死と宗教——宗教学・死生学の立場から』、二〇一四年に人文社会系研究科に提出された学位論文。

- 4 Hernan Feifel ed., *The Meaning of Death*, 1959 (大原健士郎、勝俣映史、本間修訳『死の意味するもの』、岩崎学術出版社、一九七三)。この論文集は、一九五六年のアメリカ心理学会のシンポジウムの記録であり、内容的には多様だが、フェイフェル自身は高齢者や終末患者における死の不安と恐怖の専門家であった。

- 5 榎井迪夫ほか訳『ヒロシマを生き抜く——精神史的考察』、岩波書店、二〇〇九。

- 6 死に対する恐れが、「恐怖」(fear, terror)であるのか、「不安」(anxiety)であるのかという点自体、意見の分岐がある。前者は死にゆく過程における苦痛や他者の死に対する反応になるが、後者なら存在消滅の恐れのような抽象的な問題になる。このことから、死の恐怖／不安とされるものを厳密に区分して議論しようとする試みがタナトロジーではな

9. Wass & Neimeyer, p.52, ムスリン、三三二〜三九頁。
ゆれてくる。
- 7 Elisabeth Kübler-Ross, *On Death and Dying*, 1969. (鈴木晶訳『死ぬ瞬間——死とその過程について』中公文庫、二〇〇一) キューブラー・ロスが否認↓怒り↓取り引き↓抑鬱↓受容という五段階を提示したことは有名であるが、そこでは「受容」は従容として死を受け入れるといった状態からはほど遠いものとして描かれているにもかかわらず、受容が全ての死にゆく者にとって望ましい結果であることを主張する理論として理解された。Nelda Samarel 前掲論文、pp.93-95。
- 9 付言しておくなら、このような死の恐れを克服し受容に至るとする、一直線的な悲嘆のプロセスのモデルは、現在も維持されているわけではない。この点に関しては、Robert Neimeyer ed., *Meaning Reconstruction and the Experience of Loss*, 2001. (富田拓郎・菊池安希子訳『喪失と悲嘆の心理療法——構成主義から見た意味の探究』金剛出版、二〇〇七)。
- 金子絵里乃前掲書。樽川典子「死別体験の受容と死者の存在」、『喪失と生存の社会学——大震災のライフ・ヒストリー』、有信堂、二〇〇七参照。
- 10 アリエスの記述によるなら、中世の段階では人は教会の敷地内に葬られ、そして教会は世俗的な活動が行われる場でもあったため、生者と死者は教会において共存していた。死が衆人環視の中で起こることは普通であり、既述のように、死とは最後の審判を待機している状態と考えられたので、生と死の間に絶対的な断絶があつたわけではなかった。死と戦う、死を乗り越えるというメンタリティが生まれたのは、彼の言う「遠くて近い死」の段階、ルネサンスと宗教改革の時代である。その時期には死体を科学的研究の対象とし、死の秘密を解明することで死を乗り越えることが希求された。
- 11 相良亨『日本人の死生観』、ペリかん社、一九八四。
- 12 竹内整一『日本人は「やさしい」のか——日本精神史入門』、筑摩書房、一九九七。『おのずから』と「みずから」——日本思想の基層』、春秋社、二〇〇四。『はかなさ』と日本人——「無常」の日本精神史』、平凡社、二〇〇七。『かなしみの哲学』、NHK出版、二〇〇九。『日本人はなぜ、さようならと別れるのか』、筑摩書房、二〇〇九。『花びらは散る 花は散らない——無常の日本思想』、角川学芸出版、二〇一一。

- 13 加藤周一、ライシユ・リフトン、矢島翠訳『日本人の死生観』、岩波書店、一九七七。生物学的とは個人が死んでも、所属集団が永続することに永遠性を見出すタイプ、神学的とは魂の不死、来世あるいは再生の信仰、創造的とは個人が死んでも、その業績は残るといふ考え方、自然的とは個人の死を越えて自然が存続し、個人はそこに回帰するといふ感覚、経験的とは何事に集中すること、生死の対立自体を相対化することを指す。
- 14 島蘭進、竹内整一編『死生学とは何か』、東京大学出版会、二〇〇八。

(いけざわ・まさる 東京大学文学部死生学・応用倫理センター・センター長)